

「柏崎の水」

旧妙法寺峠（沖見峠） 笠松の清水

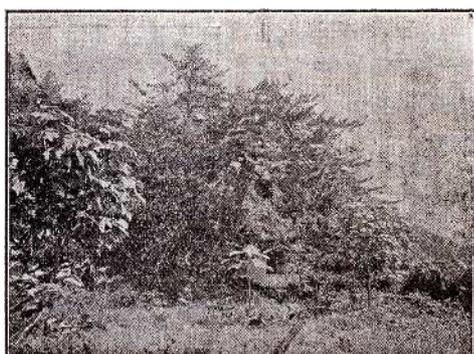
海上交通の要所柏崎と城下町長岡を結ぶ重要な役割を担った旧長岡街道。そこに置かれた宿場の一つである妙法寺は、古くから大名や文人が多く往来し、十返舎一九の紀行文「^{かなのわらじ}金草鞋」にもその名がみえる。ちなみに妙法寺という地名は、この地が古来より草生水を産出し重宝したので如宝地といったことが由来とされており、「金草鞋」にも「当国七不思議之内 ^{くそうず}臭水の油 ^{にょほうじ}如法寺村または黒川村にあり」と書かれている。

妙法寺の宿場を過ぎ柏崎に向かう山路の頂、標高174メートルの場所に、かつて妙法寺峠と呼ばれた場所がある。そこは遠く日本海を望む絶景の地であった。大正時代に出版された「^{あんとしあひ}温古の菜」によれば、その風景の素晴らしさは「爽快で勇気が湧いてくる」「峠を下るのを忘れてしまう」ほどであったという。往時には茶屋がたち、夏でも清々しい風が渡るこの場所は、多くの旅人の憩いの場所であったのだろう。

旧妙法寺峠には「笠松」と呼ばれる巨大な松の樹があった。「名木笠松は天文十二年上杉謙信の手植という。周囲一丈程。枝葉が繁茂して笠の形をし、能舞台の鏡板の松そっくりの姿であった。」「宿場町妙法寺の文化」その大きさは、枝葉の下に100人が入ることができるほどであったという。また、笠松の近くには清水が湧き出していた。



妙法寺峠 笠松の清水跡



明治期の笠松
「越後鉄道案内」
(1912年刊行)所収



笠松のあった場所
中央に見えるのが
お地藏様
旧長岡街道が奥へと
続く

延宝9(1681)年7月19日、長岡城主牧野忠辰は、大勢の家臣を従えて高田城に向かう道中、笠松の清水で休憩した。ここで忠辰が「一つらにわけてむすばむこの清水」と詠んだところ、近侍の本富政右衛門は「先わが君へ初をささげて」と、続けたという。

現在の清水は、かつてそれが存在したであろう場所に標柱が立つのみである。笠松は昭和36年の第2室戸台風で大きな被害を受けたのち次第に弱り、昭和45年に枯死したという。昔の面影を残すものは、笠松の真下にあったお地藏さまのみである。

平成12年、礼拝から妙法寺を経て長岡に至る県道礼拝長岡線の「沖見峠トンネル」が開通した。このトンネルの名前は、多くの文人・墨客が旧妙法寺峠を「沖見峠」と呼び、良寛も「霞立つ 沖見嶺のいわつつじ 誰が織りそめし唐錦かも」と詠んだと伝わることから付けられた。また、旧妙法寺峠を史跡として整備しようという機運が地元の方々の間で高まっていると聞く。古い歴史を持ち名勝と謳われたこの場所は、車社会化により道路交通網が進歩した現在でも、人々に忘れ去られることはない。

参考にした本(すべて郷土資料 ご利用の際はカウンターまでどうぞ)
「西山町誌」西山町誌編集委員会 編(224 ニシ)
「宿場町妙法寺の文化」池田政太 編(224 ニシ)
「刈羽郡二田村郷土史」前澤新二 加藤靖之 編(224 マエ)

「西山町の民俗と文化財」西山町文化財調査審議会 編(382 ニシ)
「温古の菜」温古談話会 編(050 オン)
「越後佐渡の峠を歩く」羽賀一蔵 著(290 ハカ)